
風見幽香 V S 射命丸文(一発ネタ)

セレネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風見幽香VS射命丸文（一発ネタ）

【コード】

N00340

【作者名】

セレネ

【あらすじ】

ネタです。完全にネタです。と言いかスペカすら使いません。それでもOKなら読んでやって下さい。

(前書き)

- ・ 作者はまともな戦闘がかけません。
- ・ また中途半端に言葉を弄すタイプです。
- ・ 力関係は作者が一存で決めています。
- ・ 原作と多々違う設定があります。
- ・ 作者は蔵馬が大好きです。

以上の注意書きでも読んでやろうという奇特な方はどうぞ読んでやって下さい。

きっかけは些細なことだった。

文が新聞を配る途中、高速で太陽の畑の横を通り過ぎる。

その時、突如文に弾幕が襲い掛かる。

「なっ!?!」

慌てて回避する文。

「あら、避けてしまったの?当たったなら今ので許してあげたのに」

向日葵の陰から幽香が姿を現した。

「突然何をするんですかっ!」

「貴女が巻き起こした風で花びらが散ってしまったの。罪には罰を
与えるべきでしょう?」

そう言つて3枚ほど落ちた花びらを指差す。

「って、全然落ちて無いじゃないですかっ!そのくらいのことです
然攻撃しないで下さいよっ!?!」

幽香のこめかみがピクリと動く。

「その、くらい？・・・ふふ、ふふふ。そうね、でも貴女の新聞より余程価値があるわよ」

今度は射命丸のこめかみが動く。

「さすがアルティメットサディスティッククリーチャーですね。わたしの新聞の素晴らしさが理解出来ないとは。脳みそまで筋肉なんじゃないですか？」

嫌味の応酬が続き、互いにヒートアップしていく二人。

「あら、貴女もくだらないと思ってるんでしょう？酷く虚しい射命丸って名乗ってるくらいだし」

「あやや、次の一面が決まりましたね。」太陽の畑の主、ついに更年期障害か！？”なんてタイトルはどうでしょう”

「ふふふ、もしかして天狗無勢が喧嘩を売っているのかしら？」

「いえいえ、誰かさんみたいに戦闘狂ではありませんし、売ったりなんてしませんよ。売ってるなら買いますがね」

・・・。

互いに押し黙り気まずい、否、険悪な沈黙が訪れる。

次の瞬間、

「「勝負っ！！！！」」

二人は同時に仕掛けた。

ここで一つ余談だが、里の人間の意識調査の話をしよう。里の人間に幻想郷で一番強い妖怪は誰かと尋ねてみた。すると大多数がこう答えた。

八雲紫だ、と。

賢者と呼ばれるほどの膨大な知識。長き時を経て得た強大な妖力。最早反則としか言いようのない壮大な能力。なるほど、確かに最強と呼ぶに相応しい。

次点に上がるのは妖怪の山の主だった。

しかし、最も恐ろしい妖怪は誰かと尋ねたところ、皆が口を揃えてこう答えた。

風見幽香が一番恐ろしい、と。

その膨大な妖力による身体能力もさることながら、敵に対して一切躊躇することのない気性。目を付けられたら逃れることは到底不可能である。

しかし、その幽香が今、押されていた。

ほぼ全てにおいて上の幽香に対し、射命丸が唯一確実に勝っているものがある。

そう、それは速さであった。

人間に比べれば強靱なものの、射命丸は決して頑健とは言えない。

幽香には一撃当てるだけで沈めかねない膂力がある。

しかし、それも”当たれば”である。

もちろん幽香が遅いわけではない。

ただ、射命丸が速過ぎるのだ。

先ほどから幽香の放つ弾幕は全てかわされている。

対して射命丸は少しずつ幽香を追い詰めていた。

「どうしましたっ、フワーマスター？全然当たりませんよ！」

射命丸が高らかに声を響かせる。

「くっ、チヨロチヨロ目障りね」

対して幽香は余裕がないのか、先程からほとんど話さず、時折弾幕を放つ以外は回避に専念している。

ややテンションが上がって来たのか射命丸が叫ぶ。

「あなたに足りないのはッ！情熱思想理想思考気品優雅さ勤勉さ！

そして何より

速さが足りない！」

訂正、どうやらかなり上がっているらしい。

「なっ、あっ!?!」

一方的に攻め続けていた射命丸が突如墜落した。

「ぐうっ!?!?!?!、か、体が動かない!?!」

地に落ちた射命丸が緩慢な動きでもがく。懸命に立ち上がろうと手をつくが力を入れる端から崩れてしまう。

「これは……、一体……? フラワーマスター! 一体何をしたんですかつ!?!」

必死でもがきながら幽香に訊ねる射命丸。

幽香は口元をほころばせながら話し出した。

「ねえ、知ってるかしら? 花には色々種類があるのよ」

幽香はゆっくりと射命丸に近付きながら、まるで歌うかのように続

ける。

「大きく美しい花、小さく可憐な花。
背の高い花、背の低い花。

薬草のように体に良い花、そして、毒草のように体に悪い花」

「なっ！まさかっ!？」

「毒草にも色々あるわ。致死性の猛毒から、下す程度の弱い毒。神経系を犯す麻痺毒なんて物まで、ね？」

ついに射命丸の下まで辿り着いた幽香。

「そろそろ質問に答えてあげるわ。貴女、さっきから私をこっぴど呼んでるじゃない
。」

フラワーマスター
花の支配者、それが答えよ」

「さて、お話も済んだことだし、そろそろ第2ラウンドを始めましょうっ。」

「え？ちよ!？わっ、私動けないんですがっ!？」

「ふふふ、大丈夫よ。命までは取らないから」

「ひいつ！？あつ！ギブつ、ギブアップですつ！」

「あらあ？さつき掠めた弾幕のせいかしら？なににも聞こえないわね」

「ちよつ、さつきまでの事は謝りますから〜！？」

「往生際が悪いわね。諦めなさい。射命丸」
サンドバッグ

「ルつ、ルビ！？ルビがおかしいですつて！？ちよ、待って！？何をす」
「……、」

い〜〜〜や〜〜〜〜！！？」

………。

幻想郷は今日も平和だった。

没バージョン

「これで終わりですっ！」

射命丸が幽香の周囲を回りながらまるで包み込むかのように弾幕を放つ。

もはや逃げ場はない。

弾幕がそのまま幽香に命中しようとした瞬間

「・・・それはどうかしら？」

地面がはじけた。

それは異形だった。

弾幕が命中する瞬間、地を砕きながらナニか巨大なものがいくつも幽香の周囲に生えてきたのだ。

それは植物のようにも動物のようにも見えた。

地から生える様は植物の茎を思わせ、また幾分鋭過ぎるものの葉も持っている。

しかし、その先　花が付くべき場所にはまるで目のない蛇のような頭が付いている。

更に、その高さは幽香の優に3倍はあった。

「なっ、何なんですか、それはっ!？」

突如現れた異形を前に射命丸の声は怯えを隠せなかった。

「ふふふ、これは魔界のオジギソウよ。この子達は気が荒いわ。火
気を持つもの、動くものには自ら襲い掛かる」

幽香は愉しげに口を歪める。

「どつやら貴女を敵として認識したみたい。精々気を付けなさい
、食べられないように」

(後書き)

駄文にお付き合い頂き誠に感謝の極みです。

作者は人伝に聞いて東方を知ったタイプなのですがその時の想像を文にした感じです。

幽香〓どS+花の妖怪〓毒とかのプロフェッショナル?という認識でした。

まあ、すぐパワーファイターと訂正されたのですがw

と言うか花の妖怪って聞いてパワーファイターが思い浮かぶかあっ

!!?!?と声を大にして言いたいですよ(汗)

ま、そんなこんなで書き上げた次第です。

最後にここまで読んでくれた方にツンデレ風にお礼を言いたいと思います(爆)

「べっ、別にアンタなんか読んで貰っても嬉しくないんだからっ!

・・・でも、・・・その、

・・・ありがとうっ!

・
じ
ん
き
も
い
ね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0034o/>

風見幽香VS射命丸文(一発ネタ)

2011年1月30日03時46分発行